

研究結果報告書

本研究の目的は、銃後作家であった太宰治が、厳しい国家権力のもとで、どのような表現の可能性に挑戦してきたかを検証することにある。研究対象となる『惜別』（昭和20.9）は、中国の大文豪である魯迅をモデルにした上、日本文学報国会の「大東亜共同宣言」を主題とした創作であったため、従来では「失敗作」と評されてきた。しかし、本作品におけるメディア言説の挿入や、それらをあえて逆用する作家の創作方法に触れるものは極めて乏しい。よって、私は下記の二つの観点から戦時下作家の創作方法を解明した。

（１）執筆資料との比較分析

太宰が『惜別』を小田嶽夫の「魯迅伝」、竹内好の「魯迅」や『大魯迅全集』などに基づいて執筆したことは指摘されている。確かに『惜別』は、そうした資料の文章を「そのまま引用」したり「模倣したりその影響を受けた処が過多」であることは否めない。しかし分析の結果、「幻燈事件」といった、物語のクライマックスに当たる二つの事件の改変に、太宰のオリジナルな表現が多く存することが明らかとなった。また、作品タイトルの改変（支那の人 清国留学生 惜別）を辿ることで、作品の成立背景や執筆依頼者に対する、太宰なりの反発の意図も確認された。

（２）語り方の検討

『惜別』には三人の語りが存在する。「手記」を書き記す「私」（老医師）、「僕」（「周さん」）、そしてこの「手記」を読者に紹介する「自分（太宰）」の語りである。特に「周さん」の言葉には、魯迅の文章の引用だけでなく、東条の演説内容を初めとした日本のメディア言説が、コラージュという手法によって織り込まれている。このような虚実混在の構成によって、実在の魯迅と作中の「周さん」の間には大きな断絶が生じていると言える。すなわち、太宰は魯迅に見せかけた、別人物の「周さん」物語を創造することで、戦前の情報局検閲や戦後のGHQ検閲を通過しつつも、検閲機関や同時代への反駁の意志を本作品に込めたのである。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表（題名・発表者名・会議名・日時・場所等）

- （１）「太宰治「きりぎりす」試論 あとがき という装置」
何資宜、第一回東亜語文社会文化国際研討会、2012.5.25、台湾高雄市
- （２）「太宰治「惜別」試論 その執筆事情と成立背景をめぐって」
何資宜、台湾日本語文学会例会、2012.10.13、台湾台北市（予定）

論文（題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等）

- （１）「太宰治「恥」試論 愛読者と誤読者のあいだ」
何資宜、「現代文学史研究」、2011.6（54～62頁。ISSN 1883-1613）
- （２）「太宰治「惜別」試論 二つの物語」
何資宜、「国文学攷」、2013.4（予定）

書籍（題名・著者名・出版社・発行時期等）